平舘村漁協におけるホタテガイ成貝販売量の推移について

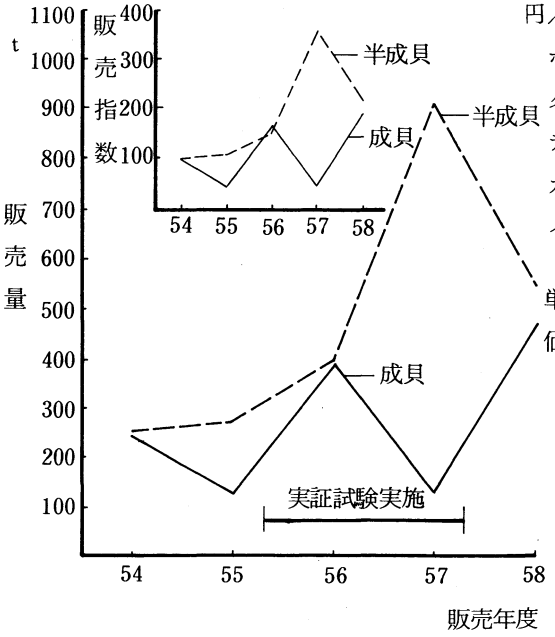
田中　俊輔

は　じ　め　に

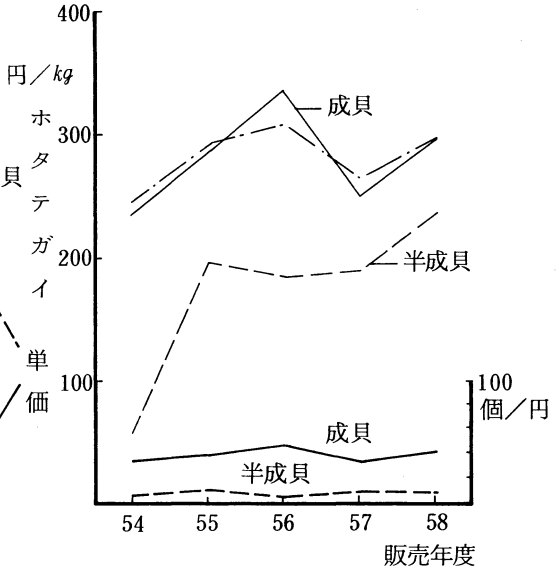
昭和45年の平舘村漁協管内におけるホタテガイ生産量は170ｔで、陸奥湾の垂下養殖ホタテガイ総生産量の23.3%*を占めた。その後各漁協の生産量増加に伴いその比率は下ったが、昭和50年には2,022ｔ、5.2%を維持した。しかし、昭和50年に始まったホタテガイの大量へい死以後、平舘村漁協管内では、成貝生産に比べて販売までの養殖期間が短く、かつ養殖管理工程が単純な半成貝販売に主体をおく安易な生産形体に走る者が多く、このために生産量は下降線をたどってきた。

こうした状態に危機感を感じた地元の強い要望に応えて青森県水産増殖センターでは、昭和55年から垂下養殖実証試験を平舘村舟岡で実施した。その結果、適正な養殖管理をすれば経済性の高い成貝ができることを生産現場で実証し[1)]、成貝生産を主体とする養殖形態に立ち戻ることを推奨してきた。

ここでは、平舘村舟岡で実施した実証試験、および実証試験に伴って実施した養殖座談会等の波及効果を考察する材料として、昭和54年度から58年度に至る平舘村漁協のホタテガイ販売状況**の推移を述べてみる。



第１図　平舘村漁協のホタテガイ販売量の推移



第２図　平舘村漁協の成貝、半成貝価格の推移
個／円は成貝の場合７個／kg、半成貝の場合25個／kgとした。－－－：陸奥湾の篭養殖ホタテガイの平均価格

＊　青森県漁連資料　４～３月　　＊＊　平舘村漁協資料　１～12月

ⅰ）成貝・半成貝の販売状況

平舘村漁協ではホタテガイを成貝（前々年度産）、半成貝（前年度産）の２種類に区分して販売している。各年度とも販売時期はほぼ同じで、昭和58年度は成貝を４月～７月、半成貝は４月～８月に販売した。

販売状況は第１図に示すように、成貝の販売量は昭和54年の241.4ｔから58年の460.9ｔに増加した。一方、半成貝の販売量は昭和54年の255ｔから57年の908.8ｔに増加したが58年には543.7ｔに減った。

ⅱ）成貝・半成貝の価格の推移

第２図に成貝、半成貝単価の推移を示す。成貝単価は、54年から58年にかけて236円／kg～296円／kgで推移した。半成貝単価は成貝に比べると低いものの58年には236円／kgになり成貝単価（円／kg）の80％に達した。しかし、１個体あたりの価格は成貝の34～42円／個に対して全て10円以下で、58年には成貝１個と半成貝4.7個が等価格であった。

ⅲ）昭和58年度における平舘村漁協管内各部落のホタテガイ販売状況

昭和58年度の各部落ごとのホタテガイ（成貝は実証試験を開始した翌年の56年に採取、半成貝は57年に採取）販売状況を第１表に示す。昭和58年度には６部落71経営体が992.7ｔのホタテガイを生産し、販売金額は26,267.9万円であった。

第１表　平舘村漁協管内各部落のホタテガイ販売状況（昭和58年度）

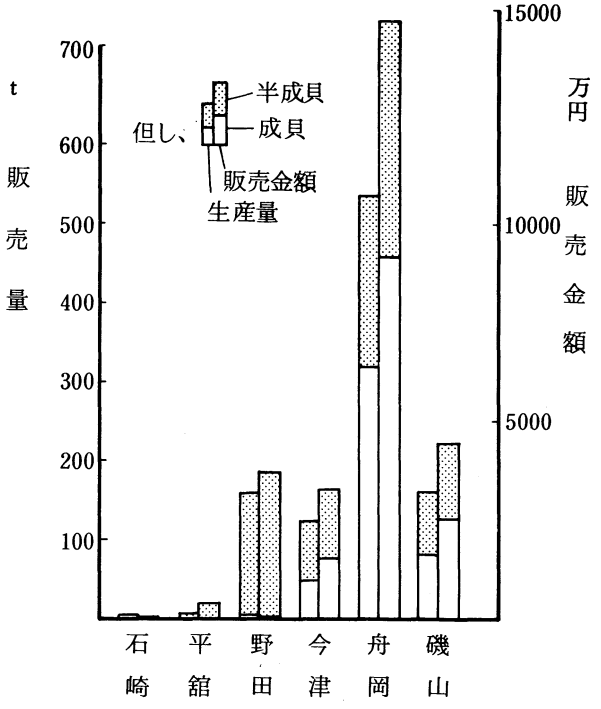
部落（北から）	経営体	販売量 kg	販売金額 円	部落合計 成貝 販売量kg	成貝 販売金額円	半成貝 販売量kg	半成貝 販売金額円
石崎	1	460	159,119	460	159,119	0	0
平舘	1	9,016	2,077,179	0	0	9,016	2,077,179
野田	26	160,606	37,408,280	4,178	1,303,141	156,428	36,105,139
今津	13	123,992	32,934,050	49,415	15,780,052	74,604	17,153,998
舟岡	21	535,230.6	145,906,427	320,802	93,097,433	214,428.6	52,808,994
磯山	9	163,376	44,194,023	82,957	25,685,089	80,419	18,508,934
合計	71	992,680.6	262,679,078	457,812	136,024,834	534,895.6	126,654,244

各部落の成貝、半成貝の販売量および金額は第３図に示すように、成貝は舟岡が320.8ｔ（全体の70.1％）、9309.7万円（全体の68.4％）、半成貝も214.4ｔ（40.2％）、5280.9万円（41.8％）と多く、平舘村漁協管内におけるホタテガイ生産の中心になっている。

第４図に一経営体当りの総販売量に占める成貝販売量の比率を各部落毎に示す。この比率は経営体によってバラツキがあるが、舟岡では61.9％の経営体が50％を越えていた。

ⅳ）ま　と　め

昭和58年度の平舘村漁協管内の成貝販売量は457.8ｔで、54年度を100とした指数が191となり、54年度以降では成貝販売量が最も多かった。しかし、半成貝販売量も543.7ｔで前年の908.8ｔに



第3図　各部落別の生貝、半成貝販売量・金額

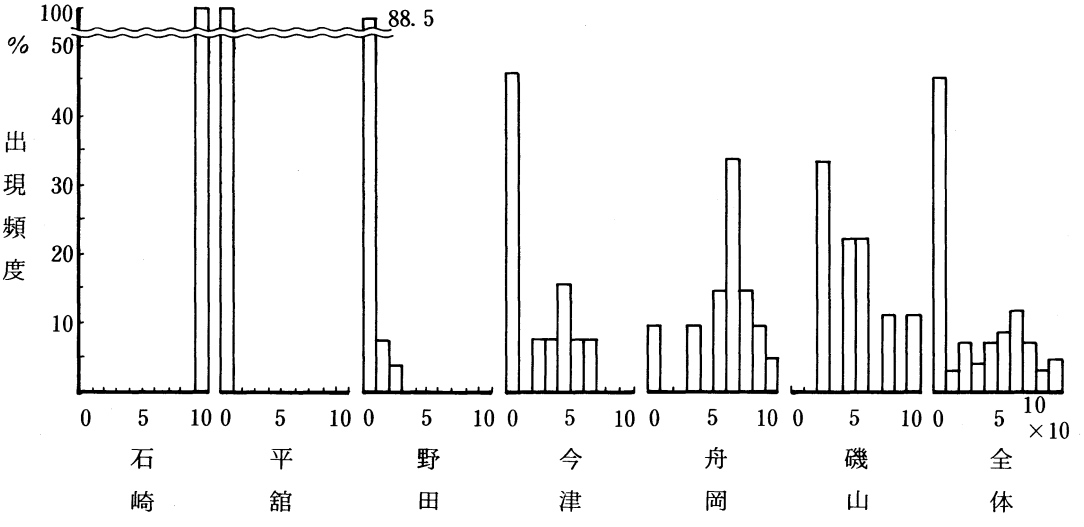
比較すると減ったものの54年度比219で成貝販売量に比較して伸び率が高い。

昭和58年度の成貝単価は半成貝の1.25倍にすぎないが、1個体あたりの価格は半成貝の4.67倍にもなることから考えると生産販売の主体を成貝にするのが有利であろう。

他種漁業との兼業の程度が異なるために各部落、各経営体のホタテガイに対する依存度に差が見られるものの舟岡がホタテガイ生産の中心になっている。

実証試験を契機にホタテガイ生産の主体が成貝に移ってきているようにみえる舟岡においても、販売の伸び率は依然半成貝が高い。

しかし、現在では陸奥湾内各漁協のホタテガイ手持ち数量には総量規制の枠がはめられている。従って半成貝販売のように販売個数を多くして販売金額をあげるような安易な養殖方法に走ることなく、1個体あたりの単価が高い成貝生産に販売の主体を向けていく努力を今後とも継続していく必要があるように思われる。



第4図　経営体当りのホタテガイ販売量に占める成貝比率の頻度

参考文献

1) 田中俊輔：モデル養殖試験（昭和55年度）、ホタテガイ養殖技術研究レビュウ昭和51～55年度、青森県水産増殖センター昭和57年3月（49～52）